

# ジュニア・カレッジの位置づけ

——教育理念からの検討——

久保田 信之

## 序

“ジュニア・カレッジは教育界の伝統に汚されていない独立の完成教育機関であって、もしもこれらが賢明に組織立てられていくなれば、教育界全体に多大の貢献をなすうはずである。そのためにも、これがユニヴァーシティーの単なる準備課程になろうとしたり、ハイ・スクールの繰り返し、上塗りになってはならないし、単なる職業訓練学校やアカデミック・アカデミーになったりするのも間違っている。要するにジュニア・カレッジは十分教育界に定着しその役割をはたす「生きた教育的単位」(Vital educational unit)にならなくてはならない。いかなる社会的要請があり時代的背景がその成立運営に参与していようと、高等教育機関であるかぎり、自からの教育的根本原理をもった「生きた教育的単位」でなければならない。かくしてこそ、4年制大学に学ぶ能力のない者の救済機関でもなく、“to save money”の目的からやむをえず進学した者のたまり場でもなくなるのである。正しい自覚をもった学生たちが誇りに満ちた状態で勉学にいそしめる教育機関にならなくてはならない。”(W. H. Snyder : The Aims of Junior College, 1965)

ジュニア・カレッジのかかえている問題は、アメリカにあっても少なくないようである。特に、その歴史において短く、これをとりまく諸条件に特殊性を有するわが国の短期大学にはことのほか難問が山積しているようである。今日わが国の短期大学は、はたしてどの程度生きた教育的単位として教育界にその位置と役割をしめしているのだろうか。

地方公共団体や厚生省管轄の各種学校は、その目的にみられる現実性具体

性の故に、個々の学校の存続度は別としても、明確にして鮮明な役割と位置を保持しているのである。技術革新の激しい今日ますますその存在価値が浮彫されてくるような印象を一般に与えているのである。

アメリカにおけるジュニア・カレッジはわが国のかかる各種学校に等しいものが一方にはあり、地域社会なり時代性になかった役割をはたしているのである。また一方アメリカにおける Community College がすべて Junior College であり、両者は同義語となっているが、これは完全に四年制大学の予備部門としての役割をはたしているのである。

しかし、戦後わが国に導入された「短期大学」は、W. H. Snyder が述べた「教育界の伝統に汚されていない……」非常に新しい教育機関であることを、われわれは先ず再認識しなければならない。すなわち「専門学校」としての伝統は明治初年来あるが、これは今日「各種学校」に受け継がれている、いわば日本人には馴染深い教育機関なのであるが、本来短期大学は歴史のなかに未だ出現したことのない新しい種類なのである。それは四年制大学とも異なり専門学校や技術者養成所とも異なるはずである。ところが、はたして教育目的に関する探求なり、そのよってたつ理念の検討が充分なされてきたのであろうか。旧制度の四年制大学や専門学校以外には考えられないという人々にとっては、いうまでもなくこれは難解なものであろうし「中途半端」なものでしかなかったであろう。わが国現在の実情は、かかる根本問題の検討を抜きにして、毎年数多くの短期大学が誕生しており、数の上からは完全に他を圧するほどのものに膨張してしまったのである。

かかる小論文において、わが国の短期大学が直面している諸問題のすべてにわたる検討を志向しているのではない。ただ簡単にいいはなっている「……短期大学は、一般教育との密接な関連において、職業に必須な専門教育を授ける完成教育機関であり、同時に大学教育の普及と成人教育の充実を旨とする新しい使命をもつものであるが、他面、四年制大学との連けいの役割をも果たす……」（短期大学設置基準、第一参照）といった文章の内実を、明確に

してみたいと願っているのである。

一見してわかるように、この『趣旨』に盛られている事柄は次の三つであるが、それぞれ相互に矛盾した面や併存しかねる側面をもったものである点に注意する必要がある。すなわち(a)完成教育、しかも職業に必須な専門教育、と(b)一般教育、換言すれば幅広い豊かな教養との関係、さらにはこれらと(c)四年制大学への発展可能性をもった予備教育との関連、を具体的にどのようにして確立するかは容易なことではないという点である。しかもこれらのどれか一つの側面にのみ偏るならば、短期大学の独自性は失われ、生きた教育的単位であることを断念せざるをえなくなってくるのである。そこでわれわれはこれらの諸概念を分析しながら、いかなる解釈をほどこせば、これらが統合できるかを考察してみたいと思うのである。

## (一) 教育目的

### (a) 職業に必須な専門教育を授けること。

実業界、産業界において自己の能力を効果的に発揮することができるよう完成教育を施すこと。

実業界、産業界の動向を先きどりすることははなはだ困難であって、未来像と称して実は現在までの過去を踏襲しかねないのであるが、あえて冒険を試みるならば、情報の氾濫は著しくなり、様々な技術が革新という名のもとに使い捨て去られ、新しい部分的な知識が現われては消え去るであろうことはなんびとも疑いえない未来の様相だと思う。従来のように比較的単純な社会にあっては、ある一つの事柄のよって立つ条件やそれのおよぼす影響・範囲などは極く狭く、多方面への配慮はさして必要なかった。政治の動向や国際経済の動きにまったく関心を持たずとも日常生活は支障なく送れたという人々の数がほとんどであって、求める情報の量も当然少ないものでよかったのである。せいぜい近隣社会の情報で十分であったし、先祖から受継がれて

きた知識、技術以外は差程役立つものがなかったのである。

しかし、将来を含んだ意味での今日では、もはやいかなるものをとってみても「自己充足的」なものはなく、すべては部分的なものになってきたのである。人間を例にとってみても、なんでもよく知っている人、その人のいうことなら間違いないなどといえる人物は現在存在しえず、一部分のことについてしか知りえない人間の集団になってきたのである。またその人の持っている知識にしても、それは極く一部分のことであると同時に、一時的、一過的なものでしかなく、絶対に正しく、永遠に真実であるようなものではなくなったのである。それ故、ある具体的な事柄を理解しようとした場合には、かかる部分的知識を多数集めなければならないのである。様々な立場からの発言に傾聴し、部分的な情報を多数収集しなければ偏見に陥ったり因襲にとらわれてしまう危険をはらんでいるのである。このことは「いかなる人物といえども無視してよい程の無力者はいない」という表現になったり「自己と異なる他者を容認せずして進歩、発展はない」といった民主主義の思想に通ずるのである。

高度文明社会にその具体的な生命を維持し、自己の運命を自己自身の力で構築していくためには、相当程度の知識、技術を修得しておかなければならないことになるのである。部分化した知識を統合する能力、他者を容認し自己自身の成長の糧としうる知性、これらは必須条件としてすべての人々に要求されてくるのである。しかも、五感に訴える具体的にして身近な事柄は、まったく逆に抽象的で観念的な、実は大変われわれ人間にとって縁遠い、まったくの部分品でしかなくなっている事実を誤りなく見抜く力と、それに全体性を伴わせる見えざる世界を見る眼が強く要求されてきたのである、ブラウン管に写し出される映像が、実はある特定のイデオロギーや世界観、人世観から採集された、いわば一面的なものであり、それ故、抽象的で観念的なものであることを知る必要があるのである。異質の情報を得ずしてはなんらの結論も引き出しえないのだという謙虚さと自己超克の姿勢が常に要求され

るのである。

実業界、産業界にあってもかかる事例は多々あるといわなければならない。一枚の伝票に記載された数字も、それが何を表わしているのか、すなわちいかなる事柄を内包しているのか、それがなんのためにどこからきてどこへ行くのか、この一枚の伝票がわが社にとってどんな役割をはたしどんな影響を与えるのかなどといった、誇張したように思えるかも知れないが、かかる伝票の背後を見抜く知識や能力がなかったならば、伝票の分類や整理を充分になしえたとはいえないのであるし、本人自身その仕事の意義を見出しえず結局それから逃避せざるをえなくなってしまうのである。実業と産業の世界において自己の能力を効果的に発揮することができるようにすることは、単に算盤が誤りなく速くできるとかタイプライターが一分間に何文字打てるとかというような末梢のことではないのである。かかる部分的知識、技術は、人間の全体的能力を分割し、ついには人格を崩壊させてしまうことをわれわれは知っているのである。職業に必須な教育とは、その職業から自己自身を成長させる有意義な全体性を吸収しうる能力を養うことであろうし、その職業に従事することによって新しい自分を限りなく発見し創造していく道を修得することに他ならないのである。新しく直面した部分的な事柄を手掛りとしてその背後を知り、自己自身を拡大させていくことは限らない飲みであるはずである。かかる自己超克の飲みをあじわいうるよう知識・技術・諸能力を陶冶していくとこそ、ここでいう職業に必須な専門教育なのである。

- (b) 狭い専門領域に深入りすることなく、分化した一領域を成立せしめている背景である、さまざまな文化に目を向けるべく、一般教養をことの他重視すること。

現代の変化してやまない流動社会にその位置を占めている専門領域は、従前には予想だにしえなかった広範囲な関連領域をもち、多様な足場をもつ

て成立してきているのである。他から遊離した単独のものとして成立したものはありえない。しかもそのいずれもが相当に発達した学問業績を採り入れており、複雑な成立因子をもったものになっている。

すでに述べたごとく、現実社会における日常生活を営み自己を維持し発展させるためには、この複雑な成立因子への十分な配慮が要求されるのである。ある一つの事例は、現実的には、さまざまなことがらと関わりをもっていながら、とくにその一つが抽象されたものとしてわれわれに訴えかけている。だからこそ感覚でとらえられるのである。ここでは全体的なものという印象を失ってしまうのである。

今、手に持って文字を印しているこの万年筆も、物質としても多くのものから出来ており、時間的にも空間的にも多くのものを内包している。しかし、かかる見えざる世界は見失なわれがちであるし、その多くを捨象するからこそ混乱なく共通性が見え、まとまったものとして認識されるのである。すなわち、この身近なはずの万年筆は実は何も知られていない遠い無縁な、あるいはその多くのものが見失われたものでしか実はないのである。

新聞、テレビを通して伝えられるさまざまな情報も身近なようではあるが、ほとんど遠い無縁なものとして流れ去っているのである。現実からひどく遊離した“観念”だけがのたうちまわっているといった状況こそ現代なのである。そもそも知識は、多種多様で多面的な現実を捨象した結果であり、それをさらに抽象化する過程のなかから、より整理された知識ができあがるため、どうしてもかかる現実ばなれの観念だけが增大してしまい、結局その観念が実体をもったもののような錯覚に人々を落し入れるのである。

しかし、かかる観念を明確にし、理解の世界にひきずりこみ、自己自身の成長を左右するような生きたものにするためには、見失われていた「大いなる背景」を鮮明にしなければならないのである。

単に知識の所有者「街学者」になるのではなく、観念化したものに具体性をもたせ、自分自身を啓発し成長せしめる糧にするところにこそ、われわれ

が求める『教養人』が位置づくのである。

情報がその一面性を隠蔽して氾濫している現代社会にあって、十分その生を営み、適応し、発展していくためには、是非ともその見えざる世界、あるいはその多面性への見通しと柔軟な配慮が要求されるのである。ややもすると一面性を忘れてその情報を絶対視したり、あるイデオロギーを完全なるものと信じこんだりして、一つの固定した基準のもとに論を展開して態度をかためがちである。これがいかに観念的であって、自己自身の成長を停止した姿であるかは、ここで多く論ずるまでもなからう。ある事柄を成立せしめている諸々の要因を可能なかぎり探る態度こそ、現実生きる教養豊かな者の姿であろう。

かかる多方面へその注意と関心とを注ぐ人間をこそ、あるいは停止することなく自己自身を改造しうる人間をこそ、われわれはジュニア・カレッジの教育課程のなかから育成しなければならないと思うのである。

(c) 専門研究への発展可能性を留保し育成すること。

以上二つの側面から、ある学問領域の深遠なることを知り、探求することに興味を覚えた者が出現しうる可能性は、当然予想されるところである。これは意図的に専門家を養成しようとした結果ではなしに、ある事柄の背後を知ったことにより自から求めて狭く深い専門研究に進もうとする人間の出現なのである。かような意味での発展の可能性を残し、決して袋小路をつくらないことも、近代学校教育の重要な留意点であったことをわれわれは知らなければならないのである。

しかし、改めて強調するまでもなく、これはジュニア・カレッジ教育の、いわば副産物であって、あくまでもその根本理念は、(a)および(b)において考察されなければならないのである。

以上でまずジュニア・カレッジの教育目的を概観したが、それは一種の完成教育機関であること、しかもそれは、単なる職業訓練機関とはことなり、現代に散在している諸問題や将来直面するであろう問題が常に大いなる背景を持ち、いかなる“個”もそれを成立せしめている見えざる全体があることを知り、そこにこそ真の意味があることを十分に認識しうる広い視野をもった具体的な人間にまで形成していくことを目指す、独特な教育機関なのだということが理解されなければならないのである。

ジュニア・カレッジの根本理念を求める場合も、特に(a), (b)の組み合わせや、兼ね合いを十分に検討しながら、そのあり方を確立していかなければならないと考えるのである。

## (二) ジュニア・カレッジの完成教育

職業教育としての完成教育にまず中心点をおいて、ジュニア・カレッジの教育活動がいかなる特徴をもつかについて考察してみよう。

職業と一口にいうが、ここにはさまざまな程度や種類が入り、一括しては議論が複雑をきわめてしまうほど実は広い概念なのである。

そこで、この概念を分類すると、次の三つになると思うのである。

- (1) ヴォケイション (Vocation)
- (2) セミ・プロフュション (Semi-profession)
- (3) プロフュション (Profession)

以下に、これらの特徴とジュニア・カレッジで目指す職業人は一体どれに該当するのがよろしいのかを論究してみることにする。

vocation とは、いわゆる大工だの酒屋だのといった職人や商人、技術者を指すことばであって、その知識なり技術は、主として狭い、昔ながらの生活経験のなかで繰り返し努力することによって習得しうるものが多く、理



論的探求よりも、その多くの時間を実践活動についやすことによって体得していけるものである。そこでこれに従事する人間は、Vocational education としての中等教育あるいはそれと同程度の教育機関で教育を受け、未熟練労働者 (semi-skilled labor) とか、非専門職労働者 (non-academical labor) として分類されるのである。

現実には中等教育機関としての商・工・農業学校がかかる職業人の形成を目的として活動しているし、それが多少発展したものとして各種学校があり、これらも分類上はここに入ろう。

各種学校はジュニア・カレッジを考察するとき重要な役割をはたすもので、女子の職業教育の場として、あるいは社会のさまざまな要求にこたえる教育機関として無視することができない存在になっていることは周目の一致するところと思うのである。

各種学校は、まさにかかる分野に貢献し、多くの職業人を養成してきた。なかでも和洋裁の学校は全体の70%近くを占め、従来はこれに続いて簿記、珠算、タイプライティング、語学、料理、看護、理容、美容等がそれにつづいて存在していたのである。昨今では、電子計算機に関する各種学校が隆盛をきわめていたり、大学入試のために有効な知識と技術とをさずける予備校も大都市では相当数出現し、それなりの役割をはたしている。

いずれにせよ、各種学校の需要は非常に地域差があり、時代や文化により大きく変動しうる可能性をもっているのである。かかる点にこそジュニア・カレッジの特殊性を考察する手掛りとなるものがあるのであって、これらの教育機関の目的や目指すところ、あるいはかかるところで養成された労働者の目指すところは、現存する知識なり技術を習得することにつきるのである。

Craft man としても分類しうるかれらは、将来よりも過去を含んだ現在にその主眼をおき、何が真に価値高きものかを自主的に探求するよりも、与えられた、あるいは現存するものに焦点をあわせ、それに向う実践的な技術や知識を習得することが唯一の教育と考える。すなわち、この卑近な目標を

効果的に速やかに達成する方策を取得することが教育であると考えてるのである。

われわれの求めているジュニア・カレッジの教育目的は、このような与えられた、既成の目的を疑わない、いわば未来性に乏しい一過的な、それ故「観念的な」という表現があてはまるようなものではなく、過去と未来とを含んだ意味での生き生きとした現在に対決するものとして確立しなければならないのである。

かかる意味からも Vocational education からは離脱しなければならないのである。

一方プロフェッション profession とは、いわゆる弁護士や医師、研究者、といった職業人を総称した概念であって、現実には四年制大学以上の教育歴を保持した者をいうのである。かれらは長年ある部門や特定のテーマを設定し、それを追求し続けているのであって、一定の領域を限りなく超克して深化しつづけている人間のことである。

かれらに対する教育は、分化したテーマ別になり、その領域に残存している未開拓地を見出すとともに少しでも未開拓地を減少させるよう方向づけることである。

文化遺産に目を向けさせるのも未開拓地を発見するためであり、また過去の方法論を学ぶのはその方法論の限界を知るためなのである。かように、この教育は常に将来を指向し、未来を創造する形で現在を超克して進むことを目的とするものだといえることができる。

ただし当然の結果としてかかる方向への努力は極く限られた狭い領域にならざるをえないし、長い年月をそのためについやさざるをえない。Graduate Course さらには Post-graduate Course がこの教育目的を達成するためには考えられなければならないのである。今日細分化されたが故に「観念化」した文化遺産が非常に多く集積されてきている。この Professional Educ-

ation はそれなりに大きな今日的課題をもってきているが、ここではこの問題に触れないことにする。しかし、いずれにせよ、これも、われわれが求めているジュニア・カレッジの教育ではないのである。

最後に残ったセミ・プロフェッションの教育 Semi-professional Educationこそが、正にジュニア・カレッジの目指すべきところであると思うのである。

前述のごとく、ヴォケイションの教育は中等教育や各種学校のそれであり、プロフェッションの教育は四年制大学や大学院の教育（今日の四年制大学なり大学院がはたして真のプロフェッションの教育であるか否かは大変大きな問題として残ろう。ある意味ではジュニア・カレッジに改組すべき四年制大学が多いと思う）とした場合、ジュニア・カレッジのそれは両者の中間であり中庸であるということになるが、これでは積極的にセミ・プロフェッションの概念を明らかにしたことにはならないし、われわれの問題の解決にはなんの役割もはたしえないのである。

われわれがジュニア・カレッジの教育の根本理念を求め、これを生きた教育的単位に育てあげようとした場合には、セミ・プロフェッションのもつ本質的属性を明確にしなければならないと思うのである。ジュニア・カレッジが教育界の伝統に汚されていないということは、同時に、明確な位置づけがまだなされていないということでもあって、ややもすると両極においやられることによって安定する組織体になるかのような印象をさえ与えかねないのである。中途半端な教育機関だというのがとき評価が、これを如実に物語っているといえよう。

セミ・プロフェッションがいかなる独自性をもった概念であるかについて、さらに論を展開してみよう。

### （三） セミ・プロフェッションの概念

ジュニア・カレッジ教育の独自性を求めようとした理論家たちが、専ら教育的見地になって確立しようとしたのがこの概念である。中間概念であるこのセミ・プロフェッションを規定するにあたって、われわれはまず次の諸点を考察する必要がある。

まず第一に、この概念をまったく先験的に抽象的に規定しようとすることは危険だということである。前二者が必然的に狭い、抽象的、観念的世界へとわれわれを導びいたのに対して、この概念こそ、具体的で現実的な生きた世界へとわれわれを呼びもどすということを知らなければなるまい。

ヴォケイションは従属的な人間存在を前提としており、極端な場合“手足となって働く存在”として位置づけられるのである。これは本来かけ替えのないはずの人間存在を軽視し、人間のなかに格差を設ける現実無視の思想に連なり、その時間も過ぎ去ったはずの過去を絶対視するように、抽象的に停止した時間のなかに自からを置く思想の産物なのである。またプロフェッションなる概念も、現実を無視し整然と一直線にのびた時間帯にのって未来を指向し、複雑多岐で躍動しているはずの現実を静止させ一面的にとらえていかざるをえないものである。それ故、俗塵に汚されるよりも真理のために真理を求めるといった抽象的な態度をよしとしてきたのである。

しかし現代の人間存在はかかる封建的ともいいうる格差を否定し、自分自身を見つめ、現実を直視する力と勇気を持ちはじめたのである。現代人による生活集団は流動化し機能化しはじめたのである。新しい文化との接触もなく閉鎖的に身分が固定しうる時代は終りを告げ、常に新しい未来が待ちかまえている、いわば ever-changing な時代に突入したのである。まさに予想だになかった文化が人々の生活を支配し、人間の思惟を方向づける時代になったのである。過去をただ単に延長することによって未来が出現するというようなのだかな時代ではなくなった。昨日とは異質な、まったく異なった明日が現われる可能性は非常に大きくなってきたのである。今日、永遠に変らざる絶対的な事物が存在するとだれが明言できるのであろうか。

変化して止まず、生き生きとして発展しつづける機能的社会にあっては、変化こそ存在や組織体の本質だという規定がなされても不思議はなく、このなかからこそ、かけ替えのない己を重視し、自己の運命をその能力と責任において切り開いていこうとする主体的な人間が産れるのではなからうか。

固定した思惟様式に慣れしたしんできた者にとっては「流動してやまぬ状態」(constant state of flux) からはいかなる一般性をも導き出せないし完全性、絶対性はえられないとして、ややもするとかかる状態を否定するかも知れないのである。かれらの発想法からすればどうしてもジュニア・カレッジの教育内容は不安定性 (uncertainty) をまねがれないことになろうし、それに所属する自己自身が不安においこまれてしまうのである。

しかし、この不安定性を積極的に評価し流動性を自由なる発展性におきかえて考えることがとができる者には、セミ・プロフェッションの意義もまたおのずから理解されうるのである。

伝統という名の因襲や歴史の必然性を脱却するところに近代はあり、自からの欲する土地に赴き、自からの欲する仕事に従事することを通して自己自身を限りなく成長させようとしたのが近代人の姿であったことはいまさら述べるまでもなからう。現代がかならずしも近代の延長線上にはなからうが、この近代人の求め続けた方向性を、すなわち「己の確立」を、すべての教育活動は目指さなければならないと思うのである。

もはや人間の世界にあって完全性や絶対性を求めることは不可能になってきたし、普遍的な基準からすべてを演繹する思惟様式には限界がもたれてきたのである。近代合理主義がたどった道は、具体的な現象から「仮設」としての原理、原則を帰納する思惟様式であって、これは当然のこととして不完全性や相対性を認めてきた結果である。原理・原則を帰納しうるにたる諸条件が変化すれば、その原理は不完全さを露呈する。不完全さを知ることは進歩の証であり、発展の結果なのであるとしてきたのである。

いうまでもなく自然科学がいち早くこの方法論を展開して絶対性、完全性

を自然界から追放した。しかしこの過程をたどることから多くの問題が派生してきたことをも知らなければならない。その第一は、統一性や全体性をもった具体的問題が、因子に分析され思惟の世界で組み立てられるがために、学問業績は“全体に帰還しえない抽象の産物”になり、架空のものになりはじめたのである。アカデミズムやプロフェッナリズムは末端の末端において存在しうただけになりだしたのである。これをいかにして、過去を背負い将来を内に宿した真の「現在」のなかにひきもどすかという、新しい問題がまさに世界的な規模において今日問われてきているのである。

具体的な現象は、たとえそれがどんなに小さなものであったとしても、他から切り離して孤立して生じたものではない。かならずや大自然（全体）と関わりをもっており、全人類と結びついており、全時間に関係しているはずなのである。とかく切断し分析して見がちな現代人の思惟様式からすると見逃してしまうことがらであるが、かかる具体的な認識は非常に大切であり、今後ますます要求されるであろうことは容易に想像がつくところである。

セミ・プロフェッションという概念をもってきてはじめて、かかる柔軟な、具体的な時間帯のなかにいる人間存在、連続した大いなる外界のなかに立っている人間存在が明確になると同時に、セミ・プロフェッションの教育を設定してはじめて、見えざる外界に強く依存しているという認識を人々に持たせるのである。ここにおいてはじめて柔軟な心の意味するところも明らかになるのである。誰かの手足の延長として位置づけられるのでもないし、専門バカという卑俗なことばが象徴するような偏頗な人間でもない真の人間がここに出現するのである。

考えようによれば、偏頗な人間を作ることは容易であろう。限定された領域以外に触手をうごかさず、そこに蓄積された文化遺産をあとづけるうちには、おのずと未踏なる問題領域を発見しうるのである。方法論が定まりさえすれば一定領域の探究は時間の問題となろう。発見をなし発明をすること自体、原理的にはさほど困難なことではないのである。しかし、誰よりも硬い

鉄を作ったとか新しいカビを発見したということが一体何の意味を持つのかと問いはじめたとたん、問題は新しい世界へと拡がり巨大になってくるのである。どうしても「幸福とはなにか」「人間とはいかなる存在なのか」に接近せざるをえなくなってくるのである。

われわれが求めているジュニア・カレッジの根本理念は現実のなかから問を発し、それを追求しようとする人間の育成であり、かかる所に重大な問題があることを知りうる足場をもった柔軟な人間の育成なのではなかろうか。

#### (四) 現代の教養主義が意味するもの

百科全書的教養主義の時代は終わった。新しい国アメリカでは、1860 年 Land-grant College の出現が高等教育の意義を変えた。プラトンの教養、ストア的教養こそ大学教育の主流であるとして、従前の大学は学問を装飾品化する道を歩んできた。普遍にして絶対なる本質を高等教育課程は追求するのだといった封建的ともいえる考え方に、はじめて警告を発したのが J. S. Morrill (1818—1898) であった。かれは Community の要求に応えうる実践的力を最高学府が持たずして社会の進歩などありえないことを力説し、学問研究の中心を生活の向上、現実の課題処理ないしその指導においたのである。

現在のアメリカにあっても、その高等教育全体を貫いている理念が、かかる「現実」から発し「現実」に還元しうる専門であり、専門に足場をおいた教養の重視なのであるが、かかる新しい理念は Morrill Act の発布にその源をおくと考えるのである。(注) アメリカ高等教育の源、拙稿、日本の教育史学 第12号(講談社)

専門化という細分化がすべての学問領域に浸透し、その全体性を容赦なく寸断しはじめたがために、近代以降の学校教育では、その段階に関係なく特に知育に重点がおかれ、さまざまな学問業績(知識)を総花的に組み入れざるをえなくなってきた。高等教育にあっても、中世末の伝統をもつ総合性に

豊んだ神学，法学，医学を中心とした時代は終り，文理科学的学科は細分化され，狭い排他的な学部，学科を形成していったのである。

今日のアメリカでは従来の伝統的学科目に加え，歯学，薬学，獣医学，農学，林学，工学その他自然科学の分野が多数あるばかりでなく，教育学，商学，建築，社会事業，図書館学，ジャーナリズム，デザインなど従来の分類からすれば二つ三つに関連するものや，美容学や警察官学まで，あらゆる分野が高等教育機関に組み入れられているのである。今日アメリカで授与されている学位は2,400種以上にのぼるとさえいわれているのである。博士号においても Ph. D 以外に67種の多くにいたっていることは注目に値しよう。こういった学位の多様化は，近々50年，とくに1945年以降にみられる大学院の爆発的拡充によってもたらされたものであるが，これが個々バラバラにならず，比較的狭い排他性の強い“象牙の塔”をとらないのは，なんといっても，フックスナーが指摘しているようにアメリカ人のなかにある祖先伝来の特質でもある“get ahead”な生活態度により，困難な諸問題も get ahead 的アメリカ生活そのものによって，限りなく前進的に improve されていくであろうことを信じて疑わないところに原因しているであろう。この観念が産業の発展の原因でもあり結果でもあるという関係にたって，ますます専門化，細分化をたどりながらも具体的な，それ故，統合的な“生活”に適応しえている分化をたどったのである。

前述のごとくわれわれには多少抵抗を感じずる発想法であり，ややもすると軽薄な無秩序な実利主義と評価したくなるであろうが，アメリカにあっては一見無統一な多様化現象も，以上のようなアメリカ的生活のなかに，実は統合(integrate)されているのであることを知らなければならないと思うのである。この統合は，もちろん究極原理なり絶対的普遍性によって貫かれているものではない。アメリカの場合，この統合は「生活的統合」でありなによりも实际的であり，そしてまたプラグマティスチックなものなのである。

たとえばコロンビア大学は，自から“service station of general public”



と宣言しているのである。これこそ典型的なアメリカ高等教育の理念であろう。確かにこのようなアイディアは、産業と個人主義・民主主義との関係からみた大学の一つのあり方であるかも知れないのである。

しかし、かかる integration の核に対して、歴史的背景のちがう日本人としては、とまどい、それに疑問と問題を感じるかも知れない。

ハッチنز自身、今日のアメリカ高等教育のかかえているディレンマとして、専門主義と職業主義と反知性主義があるとしているが、かれもやはり「生活」なり「現実社会」に統合される学問諸分野の危険を予知しているのである。What society wants と What society needs との峻別の曖昧さが、このディレンマを産むのであって「社会の要求」に直接、無作意的に応えようという形で大学の「奉仕性」を考えようものなら、大学教育はその主体性を失い混乱し、自からの有機的全体性を崩壊してしまうであろうと述べているのである。この点こそ“各種学校”と“大学”の相違かも知れない。

大学が知性主義のうえにたって現実に応えうる専門主義を確立するためには、専門分野のなかに常に生き続け、ややもすると個々ばらばらになりやすい学問業績を定着させる働きを担う全体性としての「基礎」を求めなければならないと思うのである。

基礎とはアメリカの場合 more life として表現されるように、現実の物事なり行為なり思惟なりを成立せしめている具体的、現実的なおおもとなのである。われわれはこれを「一般教養」として理解してきたはずである。

専門領域がかかる基礎を離れ、雑然と散在しはじめたのは 19c 以降実際の職業的な社会の要求に、学問する心や科学する心が振り廻された結果なのであろう。特にアメリカの場合 1930 年代の社会的危機が、学生の学習意欲などとは別に、いわゆる earning a living の問題に至大なる関心を注がせ、教師たちの多くも学生の将来の生計に直接役立つ知識・技術を与えることを義務として感ずるようになったのである。教育は教育すること以外に何ものにも奉仕してはならないという鉄則からみて、生計をたてうるようにという一

面的なものに振り廻されることは教育の自殺行為に等しかったのである。知識相互が必然的に持つ断絶を埋め、調和ある全体性を成立されることを除いて教育活動はないのであって、この誤りをおかしたアメリカ高等教育も落着きを取りもどすにともない、真の「基礎」を確立する方向に軌道を修正したのである。

今日われわれは爆発してくる情報量を前にその全体性を見失っている。それらを何によって統合するか、ある情報を価値あるものとするか否かの基準はなにか、など、おそまきながら高度経済成長社会が直面する問題にぶつかったのである。

## （五）結 論

繰返すまでもなく現在のこの社会を実際に動かしているものは知識であり技術であろう。これはいづれも学問研究の所産であろう。すなわち、さまざまな問題状況を解決しえた業績なのである。かかる業績の効用性や実利性は、いかに高度な業績であろうと、それが一定の状況のなかから生れた以上、その効力は終末に達しているか近い将来達することは明らかなことである。永遠に、いかなる社会になろうとも有効性を持ち続ける所産などあらうはずもないのである。業績そのものには決して永遠性はないのである。一方かかる所産をもたらした源動力とか推進力はどうであろうか。条件が異なり素材が異なることはあらうとも将来を洞察し予見し仮設をたてる力の方こそ永遠なるものなのである。

知識・技術といった業績は過去のものであって時代とともに変わりえよう。しかしこれを媒介にせずしてわれわれはなにも創造しえず発展することができないのである。

今日ほど知識・技術を習得することと学問することや科学することが混乱されている時代はかつてなかった。もちろん学問論なり科学論のすべてをかかる小論文で解きあかすわけにはいかないが、少くともこの両者が著しく異

なることに留意しなくてはなるまい。

諸々の条件・因子を検討し、ある現象を構成している法則を仮設し、それを原理として統合を試みようとするところこそ科学する態度である。知識・技術は一時的な仮設にすぎず具体性を捨象してしまった結果なのである。

理性人は一つの事物、一つの現象に出逢った場合「何故か？」と考える。そしてその第一の原因とか原理などがなにかと考えはじめる。これは単に感覚にのぼる時間・空間を越え、種々雑多なものに縛られている状態から逃れることを意味し、その対象の本質的なものに迫っていく姿なのである。これは勿論、抽象性の追求であり体系化の過程なのである。多様性をその基盤とする具体的諸現象のなかから、ある種の枠組をもって同類性をひきだし、それを一般化し、より多くの現象間に妥当する一般性を求め、それによって個々の具体的現象をその一般原理の特殊な表現として解せしめるものこそ、法則にほかならないのである。

かかる一連の知的運動が学問としての科学であり、その結果ある条件のなかで産みだされたものが知識であり技術なのである。

明らかに推進力ともいいうる科学する心とその結果とは異なるのであって、この科学する心とは、現実生活中に生活している自己自身を統御し思惟を持続する心であり、広く視野を拡げ、とかく一面的になりやすい現実の判断を拡大しつつける心なのではなかろうか。人間はややもすると自分の立場を絶対視しそれを正当化するために資料を集めがちである。イドラ Idora から脱却するには自己を厳しく見つめ、現実のなかで実験し続けなければならないのである。科学するとはかような自己批判の継続だといえる。おすことができよう。

一般教養全般の検討は今日的大問題でもあり、また生涯教育の形において展開しなければならないために、これは別にゆずることにする。

(注) 拙稿、「大学教員に問われているもの」『望星』8月号東海教育研究所, 1971

教育界の伝統に汚されず現代的要請のもとに出現したジュニア・カレッジは、独自の仕方でカリキュラムの編成をしなければならないことはいうまでもなからう。

ここでいう“独自の仕方”を充分理解するためには、具体的なあるカリキュラムを立案してみなければなるまいが、これをなすことは今回の主旨から大きく逸脱してしまう。とはいえ、四年制大学と同一目的をもち同一課題にとりくもうとしたり、従来の大学がとってきたような「哲・史・文……」的な範疇でのみ学問領域を分類しようとする姿勢だけは捨てなければなるまい。

「形骸化現象」を醗くも露呈しはじめた今日の四年制大学には、現実の生活を生き、自己の運命を自己の力で切り開いていこうとしている学生諸君の要求に対して、まったく答える力がなく、逆にその動脈硬化を「学問水準の低下を防ぐ力」として自画自賛するほどの無知な高慢さを臆面もなく暴露している体たらくなのである。

過去の因襲に汚されず生き生きとした現実に敏感な眼を向けつづけなければならないジュニア・カレッジが、かかる混乱にあえいでいる四年制大学を模倣し、それ以上に不完全なものになろうとするにいたっては惨めこの上ないという他はあるまい。

前述のごとく、現代的要請をうけ、過去の教育界にはなかった独自性をもたなければならないはずのジュニア・カレッジが、四年制大学より一段低い教育や研究の機関であるかのように考えられているのは、日本人独特の「序列意識」のなせるものでもあろうが、そこに職を持つ者による真剣な模索がないことにも大いに原因しているようである。アカデミカルな態度という概念を、従来の意識で保持し続け、これこそ「教育の正道」であって他はすべて「邪道」であり「異端だ」としか考えられないものにはジュニア・カレッジの教育理念はおそらく理解できないのではなからうか。前述のごとく、これが「生きた教育的単位」になるためには、完成教育というにふさわしい足

場をもちながら、それを成立せしめている背景なり全体性にまで関心の目を向けることでなければならないのである。ある一つの文化遺産がいかに大きな歴史性を背景としてもっているか、さらにはそれが現代社会においてどのくらい広い分野と関連をもつたものであるかを知ることによって、真にそれを「理解」することができるのである。現実のなかに反映させながら理解することがいかに楽しい知的「冒険」であるかを体験させることこそ、われわれが採用しなければならないジュニア・カレッジの教育方法であるといえよう。かかる知的「冒険」の欲びを教場で、学生とともになしうるとき、料理学校なり英語学校とは異なる知的陶冶の場を形成しようと思うのである。

狭く小さく求める fundamental ではなく、すべてに関わりあいを持つ全体としての spirit を、可能なかぎり複雑に錯綜している現実社会（生活）に近づけることによって体得しうるように、その教育は計画されなくてはならないし、個々に分析し崩していくような critical であるよりも、あらゆる分野に豊かな関心をもち敏感な感動をなすような inspirational な知性を、現実には密着させることから養っていかなければならないのである。